



創立:1912年(成蹊実務学校)
 学生数7,708人(大学院 専門職学位を含む・2017年5月現在)

成蹊大学 ボランティヤ支援センター

東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1
 TEL.0422-37-3448
 volunteer@jc.seikei.ac.jp
<http://www.seikei.ac.jp/university/volunteer/>

設立のあゆみ

- 2005.06** 学生部長の諮問機関として「本学におけるボランティヤ活動推進体制のあり方検討委員会」を立ち上げ
- 2006.06** 「学生による社会貢献活動の推進および支援のための施策検討委員会」を設置
- 2007.04** 栗田恵輔学長(当時)より「成蹊大学ボランティヤセンターの設置について(報告)」と題する内諾が示される
- 11** 「成蹊大学ボランティヤセンター設置準備委員会」が発足
- 2009.04** 「学生ボランティヤ本部(Uni.)」が19名の学生により準備活動をスタート
- 06** 「学生ボランティヤ本部(Uni.)」の設立が正式承認され、活動を開始
- 2013.10** 「ボランティヤ支援センター設立準備室」を開設
- 2014.04** 「ボランティヤ支援センター」開設



学園本館



情報図書館

成蹊大学ボランティヤ支援センターのミッション

成蹊大学における学生及び教職員に対するボランティヤ等の地域・社会貢献並びに地域交流活動(以下「ボランティヤ活動」という)に対する意識の高揚を図り、学生及び教職員が行うボランティヤ活動等について支援すること。

【事業内容】

- テーマ事業
オリンピック・パラリンピックとボランティヤ
- ボランティヤ交流事業
- 交流・ネットワーク事業
- 人材育成事業
- 復興・創生プロジェクト
- 防災・減災プロジェクト
- 相談事業
- その他



年間活動状況

- 2017.04** 「成蹊ボランティヤガイダンス」開催
- 05** 「ボラセン・トークサロン2017-活動のための『おカネ』をゲットしよう編-」開催
- 06** 「はじめてのボランティヤ」プログラム第1弾「ごみゼロデー武蔵野市内3駅清掃」参加
- 07** 1年次必修科目「フレッシュヤーズ講座」第13回講座運営
- 08** 夏のノートテイクボランティヤ講習会運営
- 09** 「大学ボランティヤセンター全国フォーラム2017」参加
- 10** 「成蹊ボランティヤまつり2017」開催
- 11** 「東北復興・創生プロジェクト2018」事前学習会開催
「ランチタイム手話教室」開催
- 12** パラスポーツ体験会開催
- 2018.02** 「東北復興・創生プロジェクト2018いしのみき&ふくしま」現地プログラム実施
春のノートテイクボランティヤ講習会運営
- 03** 「第6回学生ボランティヤと支援者が集う全国研究交流会」参加
「東北復興・創生プロジェクト2018」成果報告会

■ 成蹊大学ボランティア支援センターとは

学生を型にはめず、経験を積み重ねることで
学生の成長を促しボランティアリーダーを育成

経済学部教授
ボランティア支援センター所長
伊藤 克容氏



STEP1

設立までの経緯

第1期 ボランティアセンター 設立に向け動き出す

成蹊大学ボランティア支援センター設立の動きが始まったのは2005年のこと。それ以前から学生生活課を中心に、ボランティア活動を行っている学生のサークルなどに対し支援を行っていましたが、大学が定期的に行っていた学生実態調査でボランティア活動をしたと回答する学生が7割を超え、学生にそのきっかけを提供する組織の必要性が高まりつつありました。こうした中で当時の学生部長である渡邊一衛氏がその流れをいち早く察し、学生部長の諮問機関として「本学におけるボランティア活動推進体制のあり方検討委員会」を立ち上げました。諮問機関において活発な意見が交わされ、その議論を成果としてまとめて学長へ報告すると、2006年には「学生による社会貢献活動の推進及び支援のための施策検討委員会」が設置されます。さらに2007年にはセンターの実務を行うための予算確保に動き出すとともに、「成蹊大学ボランティアセンター設置準備委員会」が発足し、ボランティアセンター設立の動きが一気に加速しました。しかし、当初は設立に向け前向きではあったものの、実際に活動する学生たちの中にまだボランティア活動の土壌がなく時期尚早とする学内意見もあり、一時的に先送りすることとなりました。

その後、教職員主導でボランティア活動に興味を持つ学生を集めた、「学生ボランティア本部(Uni.)」が発足。学生団体としてスタートしてボランティアを広げて欲しいという大学側の考えがあり、体育会本部のような上部団体組織として位置付けて活動を開始しました。19名の学生に



2017年度からは2020オリンピック・パラリンピックに向け、テーマ事業に「オリンピックとパラリンピックとボランティア」を掲げるボランティア支援センター事務長の藤野裕司氏



学生の自主性を優先することが学生の成長を促すと話すボランティア支援センターのメンバー。左から事務長・藤野裕司氏、所長・伊藤克容氏、ボランティア・コーディネーター・日比野勲氏と小倉美里氏。

よって始まった学生ボランティア本部(Uni.)は、その後400名を超えるメンバーを抱える学内最大の団体に発展しました。

STEP2

設立決定

第2期 学生たちの活発な活動に 後押しされて設立へ再始動

その後、2011年3月の東日本大震災によりボランティア活動が全国的な広がりを見せ、さらに学生ボランティア本部(Uni.)をはじめとする、学内の学生ボランティア活動も活発化。また他大学でのボランティアセンター設立の動きを見て、再び設立に向け動き出し、成蹊大学でも2013年4月に「ボランティア支援センター設立準備チーム」が発足します。

設立準備チームでは他大学のボランティアセンターを訪問して設立に向けた情報収集を行い、地域と結びつき、密接な活動を進めていくために地域の生涯学習センターなどを訪ねて情報や助言を得たほか、大学ボランティアセンター全国フォーラムに参加するなどして他大学の教職員等との意見交換を行いました。こうした情報収集と活動を進めながら、学内の設置場所を決めるための学内の関係部署との調整や組織体制の検討を進め、2013年10月1日の設立準備室開設を決定します。しかし、学内での合意や承認に時間がかかり、準備室の本格稼働は2014年1月に、センター開設は4月にずれ込むこととなりました。

センター開設のためには、コーディネーターの採用を急ぐことも必要でした。日本ボランティアコーディネーター協会に採用に関する助言と募集活動の協力を依頼して、コーディネーターを採

用。2014年1月から限定的に業務を開始した設立準備室は、コーディネーターの着任にともない業務を拡大し、さらに4月の開設に向けた議論を重ねました。

センター設立による 学生の期待と不安

「ボランティア支援センターの設立にあたっては、学生たちの活発な社会貢献活動を抜きにしては実現しなかったでしょう」と話すのはボランティア支援センター事務長の藤野裕司氏。「学生ボランティア本部(Uni.)をはじめ、様々なグループが数多く存在して幅広い社会貢献活動を展開し、体育会や文化会の団体が地域でその技能を披露することや、子どもたちの指導にあたる機会も少なからずありました」と藤野氏。2012年にボランティア支援センター設立の検討が再開されると、学生の間にも活動のサポートが得られることなどに期待が高まりましたが、反面、これまで自主的に行ってきた自分たちの活動に、制限がかかるのではないかと不安も広まりました。「センター設立について、大学側の情報発信が不十分でした」と藤野氏は話します。

学内最大規模の団体となった学生ボランティア本部(Uni.)からも不安や疑問が寄せられたことで、学生代表との懇談の機会を設けることとなりました。さらに学生ボランティア本部(Uni.)の役員会においてセンター設立に向けた進捗状況を報告し、さらに、総会においても設立準備の状況についての報告を行いました。学生ボランティア本部(Uni.)からは「ボランティア支援センター設立に向けて」の意見書が提出され、設立準備室が開設された後も学生代表らとの懇談を重ね、2014年4月のセンター開設後においても、互いに良い距離感を持って関係を築いていくことを確認しました。

STEP3

活動と成長

新しいアイデアを生み出し ながら学生が成長する

ボランティア支援センターは開設から3年が経ち、2017年度からは大学附属機関として着実に軌道に乗りつつあります。ボランティア支援センターの大きな行事の一つである「成蹊ボランティアまつり」では学外の個人・団体にも広く参加を呼びかけ規模を拡大し、また、2016年度のテ-



ボランティア支援センターの開設にあわせて採用された、ボランティア・コーディネーターの日比野勲氏。

マ事業であった「東北復興スタディツアー」では、石巻焼きそばマイスター認定を学生が取得し、樺祭(大学祭)に石巻焼きそばの模擬店を出店し、予定の450食を完売するなど、前年度の活動をきっかけに、学生が新しいアイデアを次々と生み出し実現させています。

「学生自身が自主性を持っていろいろな活動に取り組んでいますし、その部分は大切に、よりボランティアの輪を広げたいとは思いますが、学生は年度で入れ替わるため、受け継がれていかないという問題があります。一定の人数が継続的に受け継いでいくにはどうすればよいか、ということが難しい部分です」と話すのはボランティア・コーディネーターの日比野勲氏。「また、センターの掲示板の前に立ち止まって、中に入ってこれない学生もいて、センターはまだまだ敷居が高いと感じているのかもしれない」とも言います。

「学生に成長してもらうためには、まず、一度飛び込んでやってもらうことが大事です」と言うのは、ボランティア支援センター所長の伊藤克容教授。「失敗したとしても反省して改善すればいいし、そういう場があることが大事です」と言います。「学生が興味を持ってたくさん来てくれればいいですが、学生を型にはめるようなことになるよりは、参加している学生のニーズやレベルに合わせて、社会から求められた支援に取り組むことが貴重な経験になります。その様子をボランティア・

コーディネーターが見守るという形が理想形。学生の自主性や個性を最大限に活かし伸ばすことで、ボランティアにおけるリーダーシップも成長させることができます」と話します。



経済学部教授である伊藤克容氏は、学生からの信頼が厚く、そこが学長から認められボランティア支援センター所長に指名された。

📷 取材者の目

学生部長(当時)の強いリーダーシップと学生の活発な社会貢献活動により設立

- ・学生ボランティア本部(Uni.)の設立によって学生の自主的なボランティア活動が活性化
- ・学生団体との丁寧な対話を重ね設立

VOLUNTEER SUPPORT

■学生ボランティアサポート制度

活動をスムーズに行うための 団体登録制度

学生ボランティアサポート制度は、ボランティア支援センター開設後の2014年6月に制度化されたもので、成蹊大学の団体と個人とを対象とした、ボランティア活動団体の登録制度です。ボランティア支援センターと学生ボランティア本部(Uni.)との関係性を考えた時に、センターの下部組織に置くのではなく、並列的な立場に置いてつながっていくことが、活動においてはスムーズであると考えたことによるものです。また学生ボランティア本部(Uni.)以外にもボランティア活動をしている団体があり、それらの団体とも上下なく関わるために登録制度が採用されました。

さらに、団体だけではなく、個人でボランティアの機会を探している学生や学外のNPOなどに参加している学生にもサポートが必要であるとの考えから、団体向けと個人向けの2種類のサポートが設けられました。

登録した団体は、ボランティア支援センターが管理する掲示板やラックの使用が可能になるほ

か、セミナールームの予約利用、大学内の教室利用などでもできるようになります。個人向けは成蹊大学の学生・教職員であれば誰でも登録することができ、団体向けは成蹊学園在学学生・教職員を含む団体が登録できます。この制度は市区町村のボランティア制度を参考にして設けられました。

また、ボランティア支援センターの設立以前から、ボランティア活動や社会貢献活動を行う学生

に対して奨学金給付制度を設けています。以前は学生部の管轄となっていたのですが、ボランティア支援センターの設立とともに移管されました。

■2016年度登録実績

個人登録	55件(累計80件)
団体登録	3件(累計15件)

■2016年度学生ボランティアサポート制度 登録団体一覧

分野	団体名	分野	団体名
子ども、福祉ほか	学生ボランティア本部(Uni.)	地域	成蹊メディアクラブ
災害	学生ネットワークSTOCK	国際	オックスファムクラブ成蹊
環境	学生環境委員会	国際	LOOB JAPAN
国際	CFFチーム成蹊	平和	One Peace カフェ
災害・子ども	参考書宅救便 成蹊大学支部	地域	地域交流部
国際	国際協力サークルM.I.X.	国際	国際交流会館学生アドバイザー
国際	TFT@Seikei	国際ほか	AST (Association of Seikei TSUNAGU)
国際	STUDY FOR TWO 成蹊大学支部		

REPORT

■ 活動紹介

ボランティア支援センター 2016年度テーマ事業

東北復興スタディツアー2017 in いしのまき

2016年度の重点事業として、現地へのツアーを軸に、イベントの開催、事前学習会、報告会を組み合わせ実施。さらに、前年度のスタディツアーをきっかけに、櫛祭(大学祭)に模擬店を出店する試みも行われました。

イベント

「一緒に知ろう東北のいま」
(石巻焼きそばマイスター講習会)
2016年7月2日
会場:成蹊小学校松林館こみち実習室

石巻焼きそばマイスター講習会は、石巻茶色い焼きそばアカデミーの八木邦美氏と大野頼二氏の指導のもと、「石巻焼きそばマイスター」の取得を目指すものです。

このマイスター制度は、もともと石巻で被災された方が、支援を受けるだけの受け身姿勢をやめ、焼きそば作りを教えることで他者と関わり、孤立を防止するために始まったもの。参加者の11



石巻焼きそばづくりの実習を経て、見事「石巻焼きそばマイスター」の称号を手に入れました。

名がマイスターを取得しました。

講習会は、「東北復興スタディツアーによって実際に現地に足を運ぶことで、一人ひとりが震災を捉え直し、自分たちに何ができるかについて考える機会にしたい」という学生スタッフの言葉で締めくくられました。

イベント

「3.11に学ぶ私たちの防災」
(私たちにいまできること)
2016年11月4日
会場:成蹊大学6号館301教室

近年、数々の大地震が発生している地震大国・日本。このイベントでは、石巻市役所危機対策課から木村伸氏を招き、震災当時の体験に基づき「私たちが今できる備え、しておくべき備え」についての講演とワークショップが行われました。

木村氏は「石巻への全世界からの支援に感謝したい」と冒頭に述べ、震災後の困難だった生活状況や現在取り組んでいる地域サポート体制について話されました。

講演後は、防災アイテムの中から0次持ち出し品を考えるワークショップと、災害時の想定される被害を考え一番安全なルートを決断するワークショップが行われ、学生たちは、緊急時に何を考え、何をすべきかを知る貴重な機会になりました。



「もし、新宿で大地震に見舞われたら、どのように避難するか?」をテーマに、学生発表のワークショップを通じてみんなで考えます。

スタディツアー

**「東北復興スタディツアー
2017 in いしのまき」**
2017年2月8日～10日

2016年7月から12月にかけて「東北復興スタディツアー2017 in いしのまき」の説明会・顔合わせ会を開催し、2017年2月に2泊3日の「東北復興スタディツアー」が実施されました。「6年前の震災を忘れていませんか?一緒に確かめよう東北のいま」をスローガンに掲げ、現地のNPO法人DoTankみやぎによる現地ガイドの協力のもと、震災の爪痕を辿りました。

1日目は石巻到着後、門脇・南浜・日和山の周辺地域を、震災当時を想像しながら学生たちが歩きました。2日目には郷土料理である「おくずかけ」を、住民の皆さんと一緒に作って食べる交流会を開催。その後、蛇田第1集会所において、仮設住宅から復興公営住宅への住民移転が進む中で、どうやってコミュニティを形成していくのか、という今後の地域課題や取組についての話を伺いました。

最終日はスタディツアーの振り返りを行いました。「現地に来なければわからないことがあり、来てもわからないこともある。プライベートでもぜひ足を運んで」というメッセージや「前年度からのわずか1年で、大きな成長ぶりを感じた」という、期待の言葉を現地の方からいただくことができ、学生にとって、ボランティア活動を続ける自信が湧く貴重な機会となりました。

VOLUNTEER & SCHOOL LIFE

■ 学生ボランティアの意義とは

私の一歩が、誰かの一歩に

私がボランティアに参加する理由は、大学内外の多様な人とのつながりを作りたい、自分の経験したことのないことをしてみたいと思うからです。きっかけは、東北復興スタディツアーに参加したことでした。テレビの向こう側の出来事だと思っていたことが、ひとごとではないと実感!感じたことを、周りの人に伝えることで、その人にとっての「自分ごと」が広がったら、素敵なことだと思います。



理工学部物質生命理工学科3年
段木 佳奈さん

共生社会づくりのリーダーとしての礎

ボランティア活動を通じ、学生たちはさまざまな「出会い」を積み重ねます。こうした出会いによって、学生たちが関心を寄せる対象が拡がり、いわゆる「自分ごと」になっていきます。仲間と経験を分かち合いながら、共に活動する中で積み上がっていくものが、共生社会づくりのリーダーとしての礎となります。そんな彼らの伴走者として、私も共に社会と向き合っていきたいと考えています。



ボランティア支援センター
ボランティア・コーディネーター
日比野 勲氏

相手の気持ちを考える力

成蹊大学
ボランティア支援センター事務長
藤野 裕司氏

2014年4月に開設された本センターは4年目を迎えました。社会が激しく変化してゆく中で、行政やビジネスが追いつけない領域が多数存在するようになり、学生ボランティアの重要性は高まっています。2017年度からは「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会とボランティア」をテーマ事業に据えました。今後も学生たちの活動を支援していきます。



成蹊大学 ボランティア支援センター 取材後記

成蹊大学のセンター設立の動きは、時期尚早との意見で一旦先送りになります。それが学生団体「成蹊大学ボランティア本部(Uni.)」を生み出します。そして、この団体による学生の自主的な活動が活発化し、学生との対話を経てセンターの設立に至りました。こうしたプロセスがセンターの在り方やその活動に大きな意味を持つことになりました。



創立:1885年
 学生数24,880人(2017年5月現在)
 多摩キャンパス・後楽園キャンパス・
 市ヶ谷キャンパス・市ヶ谷田町キャンパス

中央大学 ボランティアセンター

東京都八王子市東中野742-1 多摩キャンパス6号館地下1階学生課内
 TEL.042-674-3487
 chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp
 http://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/

設立のあゆみ

- 2011.03** 東日本大震災発生により、学生部学生課主導で校内募金活動が行われる
- 08** 学生課主催による学生ボランティアを宮城県気仙沼に派遣。2011年度はのべ約400人の学生が参加
- 2012.04** 東日本大震災被災地支援団体ネットワーク設立。学生部公認の「被災地支援団体」に対し、活動費用の一部を補助する仕組みがスタートする
- 2013.04** 学生課内に「ボランティアステーション」が設置され、専任のコーディネーターが1名従事する



ボランティアセンターのミッション

志はあるが必ずしも方法論を持っていない学生たちにヒントを与え、相談に乗り、ロジスティクスの支援をすることを通じて、どのような現場でもリーダーたりうる有為な人材を社会に送り出す。



年間活動状況

- 2017.04** 新入生へのオリエンテーション・新入生勧誘活動
- 05** 春季ボランティア活動報告会・写真展
地域ボランティア「ひの新選組まつり」
- 06** 地域ボランティア「みんなの遊・友ランド」
- 07** 夏季ボランティア説明会
- 08** 夏季ボランティア(8/5 ごろ～)
- 09** 夏季ボランティア(～9/20 ごろまで)
- 10** 夏季ボランティア活動報告会・写真展
- 11** 大学祭「白門祭」での出店
- 12** 冬季ボランティア(12/23 ごろ～)
- 2018.01** 冬季ボランティア(～1/7 ごろまで)
- 02** 春季ボランティア(2/5 ごろ～)
- 03** 春季ボランティア(3/31 まで)

■ 中央大学ボランティアセンターとは

ボランティア活動を通じ、豊かな人間性と独創性を備えたリーダーシップを発揮する人材を育成します。



ボランティアセンター長
法学部教授 中澤 秀雄氏

STEP1

設立までの経緯

大学OBをきっかけに 学生課長の思い切った決断が 機運に

中央大学のボランティアセンターは、2011年の東日本大震災が契機となり学生部が主催した気仙沼大島ボランティアからスタートしました。「どちらかといえばそれまでは消極的だったと言えるかもしれません」と話すのは、現在ボランティアセンター長である中澤秀雄氏です。「それまで大学のボランティアとして、いくつかの公認サークル団体が地域の福祉施設に行っていました。大学側は特に関与していませんでした」。そのような状況の中で、東日本大震災後に気仙沼の大島で活動している大学OBから「これほどの災害に中央大学が何もしないのか」と協力を促す声があり、当時の学生課長が協力を決めました。東日本大震災に伴う学生ボランティア活動についての修学上の配慮に関する通知が4月1日付で文科省より発せられていますが、中央大学では学生の安全を懸念し、被災地での活動を控えるようアナウンスしていました。その中で学生課長が思い切った決断をしたことで、協力への機運が高まりました。さらに大学に声をかけたOBから学生の交通費を全部負担するという申し出もあり、急ぎょ、学内に気仙沼大島ボランティアがインフォメーションされることになりました。

被災地との関係構築により 学生団体主体の体制に

当時、赴任3年目で法学部の教授であった中澤氏は、個人の立場で被災地に足を運んでいた経験から、自分にも何かできることがないかと学生課に問い合わせをしたことをきっかけに、当時



右)ボランティアセンター長・中澤 秀雄氏
左)ボランティアコーディネーター・開澤 裕美氏

の学生課長にいろいろなアイデアを提案するようになっていました。

2012年4月に中澤氏は学生部委員となり委員会の運営側に参画。委員会に新たに設けられたボランティア担当委員に就任します。

震災から1年が経過し、学生が宮古市や気仙沼市などのそれぞれの地域との関係性を築きつつありました。活動を継続・発展させるためにも、今後は学生部主催ではなく、学生自身が主体的に活動した方がよいと考えました。2014年4月には複数の学生団体活動を自主性を尊重しながら支援する体制として、学生部が主導し「学生団体ネットワーク」を構築します。

学内の競争的資金を獲得し コーディネーターを採用

「東京6大学ボランティアセンター連絡協議会に以前より参加し、ボランティアコーディネーターを置いて活動している他大学の様子を見て、運営の立ち遅れを痛感していました」と中澤氏は言います。創設されたばかりの教育力向上推進事業という学内の競争的資金制度を通じて、3年間の財源となる資金を得たことで、2013年4月にコーディネーター1名を雇用し、名称を「ボランティアステーション」に改称。2014年4月からは「ボランティアセンター」となります。学生部の限られた職員で運営していくことには限界があり、「早い段階から専任のコーディネーターを置きたいという思いはあり、また名称もセンターにしたいと考えていました」と中澤氏。ステーションという名称では臨時の組織で、責任ある組織に見てもらえない部分があったとも言います。

学内の正式な組織に

また、2015年4月にはボランティアセンター運営委員会が設立され、全学部より選任された委員を統括する正式な学内組織となり、センター長に中澤氏が着任します。さらに財源として「教育力向上推進事業」を再度獲得し、ボランティアコーディネーターとして開澤 裕美氏を雇用。ボランティアコーディネーター2名体

制となります。しかしその後都合により1名が退職。再び1名体制となります。「その時にもう1名雇用し2名体制にできなかったのは、教育力向上推進事業が3年間の期限付き予算のため、先の状態を見通すことができなかったためです」と中澤氏。今後は、ボランティアコーディネーター雇用の費用を大学の正規予算に位置付けられるかが大きな課題となっています。

STEP2

学内理解

「勢い」と理解ある 教職員の存在が力に

ボランティアセンター設立の最大の課題は、学内の理解をいかにして得るかであり、現在でもその努力が続いているとも言います。そのような状況でセンター設立を実現するには「勢い」と共に理解のある職員の存在も不可欠でした。学生課の事務長・担当課長・副課長などの理解があり、さらに10名程度の教員によるネットワークも大きな助けとなりました。

設立の前には、他大学のボランティアセンターも数多く訪問し、組織体制、学生に自主的に活動してもらうためのノウハウ、コーディネーターの働き方についてヒアリングを行いました。特に慶應義塾大学や関西大学が進めている、学生が社会から学び社会に貢献するという社会連携室の事例には取り入れたいと思う部分がありました。中央大学が抱える組織や予算の制約の中で、先行する大学事例に追いつこうと努力してきましたが、改善すべき点が大いにあることを、中澤氏も開澤氏も感じています。



気仙沼の魅力子供たちと共に学びながら成長する場を作る被災地ボランティア活動「面瀬学習支援」。

STEP3

成長

センター設立で活動する学生が増加

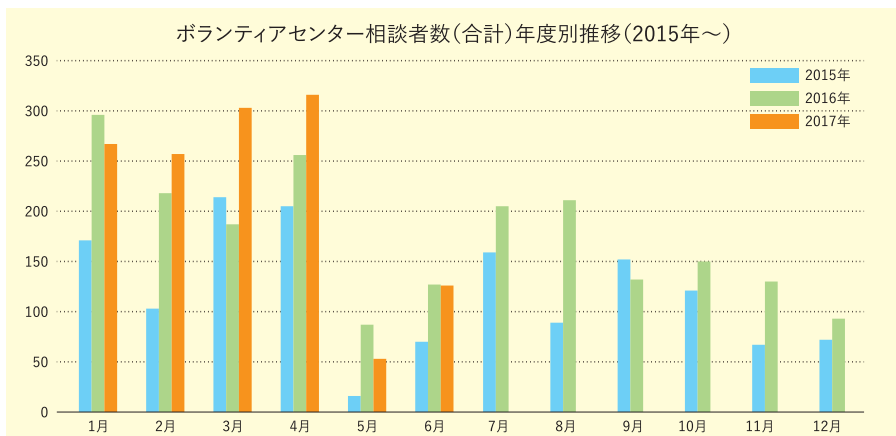
2014年のボランティアセンター設立以降、ボランティアに関する相談件数、参加者は共に増加し、その水準を維持しています。「2014年に実施した「学生生活実態調査」で、ボランティア活動

に参加したことがある学生の割合がセンター設立以前の15.1%から26.7%へと大きく増加していることは設置の効果を実証しているものといえます」と中澤氏は話します。

「活動を行う中で、いまどきの学生としては珍しく、互いに激しく意見や批判をぶつけ合うこともあります。中には厳しい批判もあり、それを乗り越えることで学生はとて成成長します」と中澤氏。

「大学を休学して被災地の現場に入るという学生もいて、進路にも影響していると感じます」と話すのは開澤氏。ステーションから始まり運営委

員会を設立してセンターへと成長しました。そして、今後の活動は一時的な資金ではなく、正式な大学予算として認められて活動することができる可能性も見えてきました。開澤氏は「いろいろな方々の支援があり、いい環境にいると思います。コーディネーターが2人体制の時にはもっといろんな所に出かけて情報を集め、アイデアも出せていたのですが、1名になって日々の業務で精一杯。ボランティア経験者をさらに増やすために、入口となる学生のニーズに合った企画をもっと作りたいと思いますし、出口であるボランティア先の整備も進めていきたい」と今後の活動について語りました。



取材者の目

被災地への支援活動を「勢い」にしてセンターが設立

- ・「中央大学は何もしないのか」と言う大学OBの声に、当時の学生課長が設立を決断
- ・他大学の取組に立ち遅れを痛感
- ・コーディネーター採用を目指し学内競争資金を獲得

VOLUNTEER COORDINATOR

ボランティアコーディネーターの役割

ボランティアセンター公認学生団体制度

学生が主役 学生に寄り添う姿勢

中央大学では2017年からは「ボランティアセンター公認学生団体」の仕組みを設け、公認の団体には顧問教員がつくことで団体の活動に対して深く関わり、できるだけ学生の活動現場に立ち会うことも心がけて、ボランティア団体を活動



「団体の代表や副代表など、重い責任を持つ立場の学生の成長をひしひしと感じる」と言う、ボランティアコーディネーターの開澤 裕美氏。

実態のない学生サークル的なものにならないようにしています。

「ボランティアは相手があることなので丁寧に関係を構築するよう十分注意し、事前・事後学習もボランティアセンターが主催して徹底的に行います」と開澤氏。また、「このような取組の結果、学生のボランティアセンターへの帰属意識は高くなり、ボランティア団体としての一体感も非常に強いものがある」とも言います。

特にコーディネーターが意識して行っていることは、「あくまで学生が主役となることです。先に教えるのではなく、一緒にやりたいことを見つけるような、寄り添う姿勢を心がけ、学生自身が学び取れる環境作りを進めています。そのためにはやはり、学生と関わり続けることが重要です」と開澤氏は話します。

ボランティア講座

東日本大震災から6年が経過した中で、東北での活動を継続している団体は、宮古市「はまぎくのつばみ」、気仙沼市「面瀬学習支援」「はまらいんや」、女川町「チーム女川」と、今なお4団体あり、中央大学ボランティア活動の中核となっています。さらにボランティアの裾野を広げるために

行われている、中大生ならではのイベントに「公務員になりたい人のためのボランティア講座」があります。「中大生は将来公務員を目指す人が多く、公務員という言葉に敏感な傾向があります」と開澤氏。イベントに参加した学生は、講師である公務員から、公務員という職業に就くうえでボランティア経験がどのような意義を持つものであったかを聞き、また同時にボランティアの現場を知ることによって、ボランティアへの意欲を高めるきっかけとなります。ほかにも「公務員と巡る五感で感じるバスツアー」「一歩踏み出したいアナタのためのボランティア講座」など、中大生の興味に合わせた様々な講座が企画されています。



「公務員になりたい人のためのボランティア講座」。バスでボランティアの現場をまわり、ボランティア経験の意義を肌で感じます。

REPORT

活動紹介

被災地支援ボランティア

はまぎくのつぼみ

2016年8月3日～7日・
8月25日～29日・9月3日～7日・
12月25日～27日

はまぎく魂は宮古と共に ～つながりの創造～

「はまぎくのつぼみ」は岩手県宮古市を拠点として活動しています。「はまぎく」は宮古市の花であり、その花言葉は「逆境に向かう」です。東日本大震災にも屈することなく、復興を遂げようとしている宮古市において、メンバーの一人ひとりが、自分たちに何ができるかを真剣に考え、話し合いながら復興のお手伝いをしています。

2016年度は、メンバーの人数増加と宮古市の復興状況に伴い活動内容にも変化がありました。4月の新入生勧誘活動の結果、意欲のあるメンバーが大幅に増加し、それに伴って役割分担を行い、東京での復興支援物産展も活発化することができた反面、人数が増えたことでスムーズな意思疎通や活動の意義や目的の共有が難しくな



宮古市津軽石地区の災害公営住宅集会所で、入居者の皆さんとの交流会。

るという課題も生まれました。今後は意見交換や一人ひとりが考える時間を確保することが重要になると考えています。

活動は東日本大震災から5年を経て、住民の方々の仮設住宅から災害公営住宅などへの転居が進んだことで、活動場所も災害公営住宅の集会所などを中心とするものに変わっています。宮古市社会福祉協議会の協力のもと、あらたに津軽石地区の公民館で夏季と冬季にサロンを開催しました。公営住宅にもともと住んでいた方と、他地区から入居した住民を学生がつなぎ、住民同士の交流の契機となることを目標にしています。

宮古市が抱える問題は、目に見えることだけではなく、災害の影響で弱まってしまった地域コミュニティの再建にもあります。「はまぎくのつぼみ」は、地域内での人と人のつながりを深めるために「何が必要とされているのか」「どのような活動を行うべきか」を常に考えながら活動しています。

チームくまもと

2016年5月21日～22日・
6月18日～19日・7月10日～12日・
8月22日～26日

いま、ここから

くまもとのためにできることを

2016年の熊本地震の発生を受け、「チームくまもと」を結成。現地ニーズに柔軟に寄り添った活動を行い、参加学生たちの自身の可能性や視野を広げるきっかけを生み出しています。

2016年度の活動では、足湯と同時に手のマッサージをしながら会話をする足湯ボランティアと、被災した農地での草取りなどの農業ボランティア



「チームくまもと」の活動はまだスタートライン。今後も被災地に寄り添い、活動を続けていきます。

を実施。足湯ボランティアでは、被災者との会話を通じ、現地の具体的なニーズや地震を経験した方々の本音を聞くことができ、物事をより客観的に捉え、学生ボランティアの視野を広げる機会にもなっています。

りこポラ!

ボランティアを日常に

「りこポラ!」は「理工学部でもボランティアしよう!」から名付けられた、理工学部のある後楽園キャンパスを中心に活動を行う団体です。

理系だからこそ、地域や社会の問題に論理的・科学的に取り組み、貢献できることはきっとあるはず。またボランティア活動で得られる気付きや充実感を人と共有することで、考えをさらに深め新たな気づきを獲得することができます。理系ならではの活動を通じて、経験と学びのサイクルを生み出すことを目指して、活動を続けています。

【主な活動】

- ・ボラカフェ
- ・クリーン大作戦
- ・文京区周辺のボランティア活動と紹介
- ・ボランティアセンターの学生スタッフとしての役割

VOLUNTEER & SCHOOL LIFE

学生ボランティアの意義とは

知識や経験を活かし 自分で考えやってみる

「やって楽しい」ではなく、「何か・誰かのためになるにはどうしたらいいか」を第一に考え、実現するためには知識や経験をどう使うか・得るか、周囲とどのような関係を築くか実際にやってみる必要があります。ボランティアが一般的な授業やサークル活動とは異なるところだと思います。

文学部・心理学専攻
大谷 夏子さん



学生ボランティアに対する思い

ここ数年、私達の地域活動に学生を受け入れてきましたが、ボランティアとは単なる無償労働ではなく、労働対価としての貨幣価値に縛られない活動であることに気付かされました。全ての活動を金銭に換算する資本主義社会が限界を露呈しているなか、若者が幸せを実感できる社会を創造する糸口はここにあると思います。

日野市・落川交流センター
事務局長
原 耕造氏



様々なボランティア経験を

中央大学 学生部 学生部長 森 正明氏

東北や熊本のボランティア活動を継続する中大生にたくましさを感じています。ともすれば、無関心と形容される大学生の素晴らしい一面を見せてもらっています。2019年にはラグビーワールドカップが日本で開催され、その翌年には東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会があり、ますます大学生がボランティア活動に果たす役割が求められています。これまでにボランティアを経験した人も未経験の人も、これを機会に積極的に参加し充実したキャンパスライフを送ってほしいと思います。



中央大学 ボランティアセンター 取材後記

東日本大震災を機に気運が高まるものの、センター設立には学内理解と予算・人員が課題でした。中央大学は他大学とのネットワークを通じ、しっかりとした組織の必要性を感じボトムアップ的に具体化へ。学内の競争資金の獲得は中央大学の特徴です。理解ある職員と教員のネットワークが学内理解を得る上で、またその後の運営にも大きな力になっていると思います。